

安藤正人教授ご退職に寄せて

Messages for Prof. Masahito Ando's Retirement

「安藤先生に初めて正式にお会いしたのは…」

入澤寿美(アーカイブズ学専攻教員)

安藤先生に初めて正式にお会いしたのは、2007年の暮れに行われた2008年度から開設されるアーカイブズ学専攻立ち上げについての打ち合わせ会であったと記憶しています。それ以来安藤先生の退職まで約10年間の短いおつきあい(今後も何かとお会いできるかとおもいますが)でした。とりわけ2013年度から始まった安藤先生が研究代表者での科研費基盤研究(A)「国際コンソーシアムによる『原爆放射線被害デジタルアーカイブズ』の構築に関する研究」に分担者として参加させていただいてからの4年間は、専攻に関する業務以外に、研究会等でご一緒する機会が多くなりました。この科研費は以前先生が行われていた科研費での研究で、NAS(全米科学アカデミー)に保存されていた原爆調査委員会(ABCC)での記録資料をデジタル化した、約14万画像のデジタルアーカイブズ構築を一つの目的としたものでありました。14万画像の全てにおいて目録記述を行うのは時間的に不可能と私は思い、それら19シリーズには1500強のファイルがあるのを各ファイル内のアイテムをPDF化して構築することを提案したところ、先生に受け入れられ、無事デジタルアーカイブズを構築することができました。それを先生がおやめになる一月前にシステム全体をテキサス医療センターのアーカイブズに引き渡すことができ、先生との唯一の共同研究として良い思い出になりました。

今後ともよろしく願いいたします。

「安藤さんとの二つのシンクロ」

高埜利彦(アーカイブズ学専攻教員)

あれは、私が在外研究でパリに行った時だから、1986年のことであった。ロンドンにいた安藤さんから、パリ15区のアパートに手紙が届いた。国立史料館からの在外研究で、ロンドン大学大学院においてアーカイブズ学研究に取り組んでいた安藤さんが「自分はこれからアーカイブズの世界で生きる」と、決意を述べた手紙であった。換言すれば、歴史学(日本近世史)との決別宣言であった。

東京大学史料編纂所に置かれた文学部国史学科の研究室で、大学院生の何人かで研究会を開いたとき、そのうちの誰かが「今度駒場から本郷に進学してきた3年生は優秀だそうだ」と言った。通常は、文学部国史学科への進学は、倍率の高い国際関係論などを目指す人たちとは異なり、私のように駒場の時は単位だけもらって低空飛行で進学するものと決めてかかっていたので、

国史学科に成績優秀者が数人進学したことに驚いた。その一人が安藤さんであったことは、後に知る。その後、私が史料編纂所に勤務しているころ山梨県の大月市史の編纂で、安藤さんと一緒になるなど、日本近世史研究の仲間として活動するようになった。とくに1981年5月の歴史学研究会大会で安藤さんが近世史部会の報告者になった時に、近世史運営委員会の一員としてサポーターとなった私は、安藤さんが今後の日本近世史研究を担う一人になるものと大いに期待していた。

その後も、安藤さんの存在を歴史研究者として捉えていたのだから、ロンドンからパリに届いた手紙に、私は、安藤さんの並々ならぬ決意を感じた。そうであるなら、アーカイブズ制度を社会に浸透させるために、自民党の政治家にも協力を求めなくてはならない、相当な困難が待ち受けているのだらうと、パリからロンドンに書き送った記憶がある。ドーバー海峡をはさんでのシンクロであった。その頃の私は、アーカイブズ学の事は何も判らぬまま、日本近世史研究が面白くなっていて近世の「家職」について論文を書いていた。

二人とも帰国して6年がたったころ、1993年から学習院大学史料館長に任じられた私のほうから、アーカイブズの世界に近づいていった。館長職にともない全史料協の役員会に出席することとなり、私もアーカイブズ制度について学びはじめていった。専門職問題特別委員会では安藤さんの他に、高野修さん、高橋実さんなどから多くを学び、日本のアーカイブズの現状が次第に判るようになっていった。

そして、安藤さんとの二つ目のシンクロである。JRの五反田駅前にあった洋食屋(レストランとは言えない)で、二人はビールを飲まずに、食事しながらアーカイブズの行く末について相談した。多分2001年の事だったと思う。学習院大学では、文科省の設置基準の大綱化(1991年)にもなつて一般教育を改編し、1995年から「記録保存と現代」の授業を開設していた。世界と日本のアーカイブズや保存科学などについて、10人以上のその道の専門の講師に、オムニバス方式で講義をしてもらったので、アーカイブズのアの字も知らなかった学生たちが、学年末の試験では、社会におけるアーカイブズの意義についてしっかり解答できるように育ていく。「記録保存と現代」の授業は現在も健在であるが、このほかに大学院人文科学研究科の授業科目に、社会人が受講できる夕方6時から7時30分までの授業科目(史料管理学などアーカイブズ学系)3科目の開設を準備し始めた。

五反田駅前の洋食屋では、日本の遅れたアーカイブズ制度を社会に認識してもらうための国際シンポジウムの開催を計画した。安藤さんの良く知る、中国人民大学の馮恵玲副学長と韓国明知大学金翼漢助教授と北海道立文書館青山英幸主任文書専門官を中心にして、三国間比較をする国際シンポジウム「記録を守り 記憶を伝える ― 21世紀アジアのアーカイブズとアーキビスト」を開催する構想を練った。問題はその招聘などの開催のための資金である。さいわいに、学習院大学戦略事業の資金獲得がなつて、2002年12月7日に

学習院大学で国際シンポジウムは実施された。200人近い参加者に、学会設立に向かうことも明言されたように、このシンポジウムはその後のアーカイブズ学研究やアーキビスト養成のための基点となるものであった。実際に、このシンポジウムに参加された松岡資明さんの「文化往来」(『日本経済新聞』2002年12月17日付け)の記事を見た福田康夫衆議院議員は痛く刺激を受け、その後の「公文書管理法」につながる運動の出発点になったように思える。

国際シンポジウムは一つの基点だが、それもこれも五反田駅前の洋食屋での安藤さんとのシンクロから始まった。

「安藤先生とベトナム」

武内房司(アーカイブズ学専攻教員)

2008年、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻のスタッフとなった私にとって、各地のアーカイブズを支えているさまざまなアーキビストたちと接するようになったのは何よりも幸運であった。そうした機会を与えてくれたのが安藤先生であった。とくに印象に残るのが、安藤先生の科研プロジェクトに加えていただき、安藤先生とともに訪問した天草である。天草は、知る人ぞ知る、近現代日本・ベトナム関係においてキー・パーソンの役割を演じた松下光広氏の故郷である。安藤先生とともに訪れた天草では天草アーカイブズの平田豊弘氏が松下光広ゆかりの施設やご遺族宅を案内してくださった。地道に郷土史の掘り起こしに情熱を傾けるこうした天草アーカイブズの活動は大変に貴重なものであるが、残念なことに松下光広関係資料の多くはすでに失われていた。アーカイブズの意義がもっと早く社会的に認知されていたら散逸を免れ、世界のベトナム学に多くの貢献をなしていたであらうに、と悔やまれてならない。

また、2013年3月には、ベトナム・ホーチミン市にあるベトナム国家第2アーカイブズセンターでの安藤先生の文書調査に参加させていただいた。同図書館に所蔵されている松下光広関係文書を発掘することで、天草になにかしかの貢献ができればと考えられてのことであつたらうと推察する。地域アーカイブズとの連携を大切にしたいという先生の思いに触れた旅でもあった。

「安藤正人先生への手紙」

保坂裕興(アーカイブズ学専攻教員)

はじめてお会いした頃から、先生には普通の話はするものではなく、研究教育上、あるいは人間として、最も大切なことや最も難しいことのみを問い、ご意見や判断をお聞かせいただくものだと思ってきた。それは長年にわたり大型研究プロジェクトを手がけつつ、日本と世界の両方においてアーカイブズ学者としての責任を適確に果たそうとされ、日にいくつもの研究・行事をかけ持ちする荘厳な姿を見ていたからであらう。私自身は、そのような先生の活動の一助になりたいと思

い、行動してきたことを思い出します。

2016年度をもってご定年を前に退職されたことは残念に違いないが、長きにわたり1日に他の者の何日分も活動してきたようなものであったことを考えれば、十二分に、いやそれ以上に筆舌に尽くしがたい貢献をされたことは誰もが認めることである。ここから、おつかれさまでした、ご健康を回復されるようゆっくりやすんでください、と申し上げる幸いです。

日本におけるアーカイブズ/記録情報の世界は、政府が自らの不祥事を契機として公文書等管理に関する継続的な政策を展開しはじめたことにより新しい時代に突入し、制度、施設、人材、そしてその成果に市民の目が向けられることとなった。これは1980年代から90年代にかけて全史料協に集った仲間が主に地域史料と自治体の文書管理を主たる対象としていた時代の課題配置と大きく異なる。府省だけでも約2万4千の課室が対象となり、その現用の公文書管理も大きな課題となる。国立公文書館も世界の主要国並の能力を持たなければ立ちゆかない。また既に、記録管理や電子情報管理との統合/融合のあり方、国・自治体の政治・行政の固有の伝統と改革の問題、現実の社会問題の解決に寄与するあり方、そして歴史学・文化学等の人文科学系研究の再活性化等々、様々な課題が明らかにされてきた。先生たちが導入し展開してきたアーカイブズ学を基にして、いかにして新しい関係と常識・標準を築き、新しい希望ある国家社会を作り出すことに貢献するのが問われている。このようなしだいで私の研究と実践のフィールドは、日本の公文書等管理政策とその運営・実施になっている。しばらくこれに取り組みますので、今後ともご指導、ご助言をお願い申し上げます。

「安藤先生の思い出」

森本祥子(2009-2011年度 助教)

安藤先生にお世話になった年数は、私がアーカイブズに関わっている年数と、イコールである。イギリスでアーカイブズの勉強をしてみたい、とお気楽に研究室を訪ねた私に、甘い考えではいけないと第一声びしゃりと叱りながら、それでも留学前にできるだけの準備をするようにと国立史料館でのアルバイトを手配していただき、さらには、毎週1章ずつ先生の研究室でマイケル・クックの本を読むという贅沢な家庭教師をしてくださった。こうした準備がどれほどロンドンでの落ちこぼれそうな日々をギリギリで支えることになったか、時間が経てば経つほど、先生のお心遣いや指導に割いてくださった時間のありがたみが増すばかりである。

その後、直接先生の下で仕事をする機会に恵まれたのは、国立史料館と学習院大学での勤務の合計6年である。が、もちろん私がお世話になったのはその6年間だけなどではないし、むしろ職場以外でさまざまな研究会に誘っていただいたり、海外からアーキビストが来日するときのお手伝いに声をかけていただいたりと、常に視野を広げる機会をいただいていたことのほうが大きい。私本来の

力からすれば考えられないほどの恵まれた経験をさせていただいてきた。同時に、先生の、日本にアーカイブズを根付かせるという強い思いも常に感じてきた。

次は私たちが次の世代に同じように手をさしのべ、そして後代につないでいくことが、先生のご恩に報いることだろう。とはいえ、未だ不出来な古参生徒としては、まだこれからも先生にご指導いただきたいと思っている。

先生、もうしばらく、よろしく願いいたします。

「安藤先生との20年」

青木祐一(2012-2014年度 助教)

安藤先生との出会いは、東京ではありません。

大学3年生の時、愛媛県宇和島市三浦地区で行われていた「田中家文書調査会」で、初めてお目にかかったと記憶しています。『草の根文書館の思想』(1998年)にも紹介されている史料調査です(安藤先生、「記録」によれば、三浦には1991年から参加されておられます)。

その後、史料管理学研修会(現在のアーカイブズカレッジ)、熊本県の天草史料調査会、山梨県大月市の星野家文書調査、沖縄県伊江島の阿波根昌鴻資料調査会、神奈川県大磯町のエリザベスサンダースホームと、20年来のご縁がありますが、戸越の史料館や大学でお目にかかるより、調査先で一緒にいる方が正直多かったと思います。オーストラリアの接收日系企業文書と島根県飯南町の調査にご一緒できなかったことは心残りです。

天草に行こうと思ったのは、宇和島で「楽しい調査があるよ」と先生に誘われたからです。アーカイブズ学専攻の1期生として入学を決めたのも、天草で「今度専攻ができるけど、青木君もどう?」と言われたのがきっかけです。

安藤先生からは何かを教わるというより、常に史料調査とともにあったというのが印象です。

2008年の専攻開設式の際、アーカイブズ学の中核となる「30人の研究グループが誕生した」、そして「学問は楽しくなければなりません」と述べられたことを、今でもよく覚えています。その精神は今でも専攻に引き継がれているものと思います。

安藤先生の「草の根文書館の思想」を弘めるのが、私たちの役目です。それは、この専攻から確実に始まっています。まずは星野家文書ですね。これからも、よろしく願いいたします。

「安藤先生との2年間」

清原和之(2015-2017年度 助教)

安藤正人先生と直接お会いしたのは私が2015年4月に着任してからのことです。いや、本当は2014年の日本アーカイブズ学会大会の際にお見かけしていましたが、

その時は自分の報告で頭がいっぱいだったためか、お話しできず仕舞いでした。

安藤先生には、アーカイブズ学を学ぶために最初に手に取ったいくつかの著書を通して出会いました。とても柔らかい文章を書く方だなあと感じておりましたが、初めて直接お会いした時の印象は本で感じていた以上にあたたかなものでした。

「清原さん。これくらい近づかないとお顔が見えないのです。」

たしかこのようにおっしゃられたように記憶していますが、急に至近距離で顔を見合わせた戸惑いととも、非常に親しみやすいお人柄に接したのを覚えています。

安藤先生の著作の中で、私の好きなものの一つに『アジアのアーカイブズと日本―記録を守り 記憶を伝える―』（岩田書院、2009年）という本があります。そのなかで、安藤先生がアジアのアーカイブズ史に関心を持たれたきっかけを語った非常に印象的な一節があります。そこでは、戦争や植民地支配による記録の破壊や散逸の問題、アジア太平洋地域の「失われた記憶」をいかに回復するかという課題に対して、日本は無関係ではないこと、相互に開かれたアーカイブズ・システム構築のために、関係諸国との連携を深めていく必要があることが指摘されています。こうしたアーカイブズ活動の基礎になるものを、韓国研修旅行でアーカイブズ関係の大学や資料館を訪問した際や、中国人民大学の馮恵玲先生、ベトナムのアーカイブズ関係機関の方々をお招きした際などに、折に触れて体感しました。それは、これまで先生が築かれてきた相互の絆、信頼関係の深さです。山梨県大月市の星野家文書調査や島根県飯南町の旧村役場文書調査などに参加させていただいた時にも、そのことを感じました。

わずか2年間という短い間でしたが、安藤先生と一緒に仕事をさせていただくなかで、アーカイブズの業務や活動を進めていく上で、非常に大切なことを教わったように思います。大変お世話になりました。ありがとうございました。

「安藤先生のご退職にあたって」

浅井千香子(2008-2010年度 副手)

「学問は楽しくなければなりません。アーカイブズ学ほど楽しい学問はありません。」

専攻開設式の安藤先生のご挨拶中の言葉がとても印象深く残っています。

2008年の専攻開設から最初の3年間を副手としてご一緒させていただいた身として、安藤先生は学問に限らず、専攻運営や史料調査・フィールドワーク、学生さんとのやりとり等、すべてにおいてこの言葉を体現していらっしゃるのではないかと改めて感じています。新しいタイプの専攻ということもあり、開設当初は何もかもが手探りの状態で、物事がスムーズに進まないケースも多々ありましたが、どんなときでも先生はその状況を楽しんでいらっしゃるようにも見受けられました。その余裕が頼もしくもあり、ときには腹立たしく(!)もありましたが、ある意味では安心できる要素だったように思います。

専攻開設から9年目とまだまだこれからのご退職ということで残念ではご

ございますが、これからも体調とお時間の許す限り、これまでと変わらず、安藤先生らしいあたたかな笑顔で専攻を見守り、導いていただければと願っております。

「安藤先生のご退官に寄せて」

後藤佐恵子(2011-2013年度 副手)

安藤先生のご退官に寄せて一言メッセージを、とのご依頼を受け、安藤先生とのこれまでを回想してみることにしました。

安藤先生に最初にお目にかかったのは、まだ私が史学科の学生で、一般教養科目である「記録保存と現代」を履修している時でした。のちに自分がアーカイブズ学専攻の副手になるということは想像しておらず、「お声が洪くて素敵な先生だなあ」とぼんやり思っていたことを記憶しています。

史学科事務室に私が副手として着任した2008年に、人文科学研究科アーカイブズ学専攻が誕生し、そして3年後、私はアーカイブズ学専攻の副手となりました。当時主任であった先生は、とてもお優しく、いつも笑顔で私に接して下さり、不安であった1年目を無事に終えることができたのは、先生の優しいお人柄のおかげであったと思います。

先生が還暦を迎えられた際、院生や教職員一同でお祝いをしたことがありました。贈られた赤いポロシャツや赤いマフラーを身に着け、お酒で頬を赤らめた嬉しそうなお顔がとても印象的で、先生がいかに周囲に慕われているのかを、改めて実感する一幕でした。

また、私が副手を退任する際の送別会で、先生が「後藤さんは、うちにお嫁さんに来てほしいくらいだな」と冗談でおっしゃってくださったことは、副手生活の中で嬉しかったことベスト3に入っています(残念ながら、安藤家のお嫁さんになることは叶いませんでしたが)。

安藤先生、これまでありがとうございました。大学を離れ、少しごゆっくりとお過ごしになられるでしょうか。ご健康に留意され、ますますのご活躍を祈念しております。

「安藤先生のご退職に寄せて」

高橋奈月(2014-2016年度 副手)

安藤先生、三年間大変お世話になりました。

右も左も分からぬままアーカイブズ学専攻の副手の仕事に飛び込んでしまった私は、安藤先生にたくさん助けていただき、守っていただいて、なんとか三年間勤めることができました。

先生の第一印象は、「まつ毛が長い先生!」でした。少年のようにきらきらした目が印象的でした。次に印象深かったのは、先生のルーペのひもが傘立てに引っかかってしまった時、私が思わず「先生、しっぽが!」と言うと、先生も「ああ、しっぽが」とつぶやかれたことです。おかしい言い回しをしてしまったのにさらりと

返して下さったことにびっくりし、「ここでやっていける気がする」と思ったのでした。

ご退職の年には、音声読み上げ機能を使って論文を読まれていて(修士論文11本、博士論文指導も)、どうしてそんな事ができるのだろうか、ものすごく驚きました。きっと先生の頭の中では、大事な事柄が鉾で留められて星座のように全体像を形作っているに違いない、と私は想像しています。一度そう考えると、先生はいつも、人、研究、場所、可能性、あらゆる輝くものを繋ぎ合わせて、大きな星座を紡ぎ上げていらっしゃるように思えます。

先生のご退職の歓送会では、いっしょに送り出していただくという得難い思い出までいただきました。歴代の院生の皆さんに愛され、多くの先生方と繋がっていらっしゃるお人柄から溢れ出たような、きらきらと輝くすてきな時間でした。立派な会であったのに、アットホームな暖かさに満ちていて、たくさんの方々の笑顔や笑い声と共に記憶に残っています。

先生の元で仕事ができたことを、とても幸せに思っています。安藤先生、ありがとうございました！



第2回ICHORA(アムステルダム、2005)にて



安藤先生還暦祝いにて[2011年10月15日]